HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第57号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2014-10-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73611
Type	journal
File Information	DRFmonthly_57.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第57号
No. 57 October, 2014

【特集１】今すぐ使いたい! JAIRO Cloud ～NII担当者に聞く～
【特集２】第２回SPARC Japanセミナー2014　参加報告
【報　告】DRF オンライン勉強会やっています
【連　載】かたつむりとオープンアクセスの日常

【特集１】今すぐ使いたい! JAIRO Cloud ～NII担当者に聞く～

国立情報学研究所（NII）は平成24年度からJAIRO Cloud（共用リポジトリサービス）の運用を開始しました。今までは主に機関リポジトリの新規構築機関向けに、システム環境を提供して構築を支援してきました。平成25年度からは既構築機関のデータ移行実証実験もはじまり、新規構築機関のみならず、既構築機関にとってもJAIRO Cloudの使用は大きなテーマになっています。そんなJAIRO Cloudについて、NIIで運用を担当されている加藤特任技術専門員、前田機関リポジトリ担当係長、後迫係員の三人（次頁写真）にインタビューをしました。

Q１． 日ごろどのような業務を担当されていますか？

A１． 主に、JAIRO Cloudやリポジトリに関わるシステムの開発・運用、およびJAIRO Cloudの広報やユーザーコミュニティの支援などを行っています。

具体的には、システム開発・運用として、JAIRO Cloud参加機関へのリポジトリ環境の提供、システムの保守・運用、NIIの山地准教授と共にWEKO[1]の開発の検討などを行っています。また現在は、既存のリポジトリシステムからJAIRO Cloudへの移行受付の準備、各機関がリポジトリのコンテンツへDOIを登録可能にするための準備なども行っています。

広報やユーザーコミュニティの支援としては、イベントの開催や広報活動、およびJAIRO Cloud講習会やコミュニティサイト[2]の運営、問い合わせ対応などのユーザーサポートを行っています。

Q２． JAIRO Cloudの参加館は順調に増えている印象ですが、今後の見通しについて教えてください。

A２． JAIRO Cloudの参加機関の数は、サービス開始から2年ほどで、当初の目標であった200機関を突破しました。現在も参加機関数は順調に伸び続けており、平成26年8月末時点では225機関となっています。

今後は、JAIRO Cloud参加機関とNIIがそれぞれの持つ財源や人的資源を持ち寄ってコミュニティを形成し、そのコミュニティがJAIRO Cloudを運営していくモデルを推進していきたいと考えています。コミュニティの在り方や制度、参加機関の費用負担も含めた財源確保などについて、参加機関とNIIとで協力して検討を行っていきたいと考えています。そのためにアンケートの実施を行っているところです。

Q３． NIIとしては既構築機関をJAIRO Cloud移行させることに、どのような目的がありますか。また、すべての構築機関がJAIRO Cloudに移行することを目標にしているのでしょうか。

A３． JAIRO Cloudは当初、独自で機関リポジトリの環境を構築することが難しい機関を優先する形でサービスを開始しました。

JAIRO Cloudのメリットには、1)リポジトリの先進的な機能を多くの機関で使えるようになる、2) NIIの提供する安定したシステム環境を利用できる、3)日本全体で見た場合にシステム保守・運用のコストパフォーマンスが向上する、などがあります。

そこでNIIでは、既にリポジトリを構築している機関もサービスの対象として参加機関を増やし、機関リポジトリの更なる発展を目指すこととしました。できるだけ多くの機関にJAIRO Cloudへ移行してきてほしいと考えています。

ただ、移行されるかどうかは各機関のご判断によるかと思います。NIIでは、日本の機関リポジトリの更なる発展のために、JAIRO Cloud参加機関はもちろん、機関リポジトリを独自で運用する機関とも、引き続き協力・連携していきたいと考えています。

（次頁へ続く）

[1] JAIRO Cloudで使用しているソフトウェア
http://weko.at.nii.ac.jp/
[2] https://community.repo.nii.ac.jp/

Q４．実際の移行で機関ごとのカスタマイズは難しくはないのでしょうか。システムを業者に外注している機関が多いと思いますが、そのような機関でも移行が可能でしょうか。

Ａ４．JAIRO Cloudはカスタマイズの自由度が高いシステムです。ただし、機関ごとのカスタマイズについては、各機関で対応していただく必要があります。カスタマイズの際は、DRFやJAIRO Cloudコミュニティなどを通じて、既に移行の実績がある機関にご相談していただくと有益な情報が得られるのではないかと思います。
　システムを業者に外注している場合は、各機関のご判断で、業者にJAIRO Cloudへの移行について依頼することも可能かと思います。

Q５．既構築機関のJAIRO Cloudへの移行も実施されるようになりましたが、移行実績はどうなっていますか？

Ａ５．平成26年9月時点では、筑波大学がJAIRO Cloudに参加しています。さらに平成26年度中には、筑波大学以外のリポジトリ既構築機関についても、JAIRO Cloudへの移行の受付を開始したいと考えています。
　現在は、移行の受付開始に向けて、千葉大学、山形大学、信州大学、核融合科学研究所と共に、既存のリポジトリからJAIRO Cloudへの移行実験を行っています。この実験で得られた成果や課題をもとに、移行しやすいシステムやツール、マニュアル類などを整備することで、リポジトリの既構築機関がJAIRO Cloudへスムーズに移行できるようにしていきたいと考えています。

Q６．JAIRO Cloudのコミュニティはどのような性格のものですか。今後、既構築機関も参加することによって、どのように変化していくと思いますか。

Ａ６．JAIRO Cloudコミュニティでは、WEKOの操作方法の不明点などをJAIRO Cloud参加機関が相互にサポートし合っています。現在、コミュニティの活動は、コミュニティサイト上での掲示板でのやり取りが中心です。JAIRO Cloudコミュニティの参加機関の特徴としては、比較的最近リポジトリを構築した機関であり、リポジトリの担当者数が1～2名の小規模な機関が多いということが挙げられます。
　今後は、リポジトリに関する経験の豊富な既構築機関がコミュニティに参加することによって、ノウハウの共有や、コミュニティによるJAIRO Cloudの運営モデルの検討が進んでいけばよいと考えています。また、DRFの実績なども踏まえ、コミュニティサイト上にとどまらず、もっと活発な交流が行われればよいと思います。

Q７．今年3月にJAIRO Cloudが研究図書館によるイノベーション賞（Stanford Prize for Innovation in Research Libraries; SPIRL）[3]の功労賞を受賞しました。この賞はどのようなもので、日本の機関リポジトリにとってどのような意義がありますか？

Ａ７．SPIRLはスタンフォード大学が主催している賞で、図書館の利用者に有益なサービスを提供するための、革新的な取り組みやプロジェクトに対して贈られます。
　JAIRO Cloudは、クラウドという先端技術を使って、より簡単にリポジトリシステムを構築できるモデルであるという点が評価されました。
　また、日本全国という大きなスケールでサービスを提供することで、高いコストパフォーマンスを実現しているという点も評価されています。
　この受賞によって、日本の機関リポジトリは効率的な運営モデルを世界に先駆けて推進していると、世界に認識されるきっかけになるのではないかと思います。

Q８．今後ますますJAIRO Cloudの重要性が増していくと思いますが、その発展のために、参加機関には何をどのように関わっていってほしいですか。

Ａ８．先ほど申し上げたとおり、今後は、コミュニティがJAIRO Cloudを運営していくモデルを推進したいと考えています。そのために、参加機関には主体的にコミュニティへご参加いただきたいと思います。特に、機関リポジトリの運用経験が豊富なDRFの皆様には、ぜひJAIRO Cloudに移行していただき、コミュニティの中心としてJAIRO Cloudの発展に一緒に取り組んでいっていただければと考えています。

インタビュー：杉山智章（静岡大学、DRF企画WG）

（写真）
左から後迫氏、前田氏、加藤氏

[3] http://library.stanford.edu/projects/stanford-prize-innovation-research-libraries-spirl/2014-prizes

【特集２】第2回SPARC Japanセミナー2014 参加報告 ～大学におけるOAポリシー：日本版OAポリシーのモデル構築に向けて～

世界的に、国や助成機関、大学等におけるオープンアクセス（OA）ポリシーの策定は増加を続け、研究成果のOA化を推進する上で重要な役割を果たしています。日本でも政策レベルでOA議論は高まりつつありますが、機関レベルでのポリシー策定例はまだ多くありません。セミナーは、このような状況を鑑み、日本のOAを推進していく上で、大学におけるOAポリシー策定が持つ意義・効果について議論し、今後のOAの在り方を考えるというテーマで開催されました。

始めに、三根慎二講師（三重大学人文学部）より、OA方針の現状を概観する講演が行われ、OAポリシーの世界的な動向から、大学におけるOAポリシーについて、これまでの成果や課題が示されました。つづいて、Stuart M. Shieber教授（Harvard University）より、講演が行われました。講演内容は、学術情報流通が抱える課題に対して、診断を行い、必要な処方箋を示すという構成で進められ、学術情報流通に重要な要素として、持続可能、公開、自由、効率が挙げられ、それらを満たすOAの重要性と、大学が行うべきOAポリシー策定の手段について述べられました。

後半には、林（名古屋工業大学）より、リエージュ大学のOAポリシーにかかる調査報告と、寺田美樹氏（北陸先端科学技術大学院大学）より国内の具体的な事例報告があり、つづいてOAポリシーへの出版社側の対応について、Andres Karlsson氏（エルゼビア グローバル・アカデミック・リレーションズ）、Antoine E. Bocquet氏（NPG ネイチャー　アジア・パシフィック）より報告がありました。最後に、「大学におけるOAポリシーは機関リポジトリを活性化するか？」というテーマで、パネルディスカッションが行われ、主に近年のOAジャーナル隆盛が今後どのように進展し、そのような状況に対して、機関リポジトリおよびそのOAポリシーが果たす役割について議論が交わされました。

セミナーは、義務化を含めたOAポリシー策定がもつ効果を確認しながらも、策定以降の運用、アドボカシー、評価等の重要さについて考えるよい機会となりました。また、今後、OAジャーナルが進展する中で、大学および図書館がOAポリシー策定によって何ができるのか、より深く検討するためのよい刺激となりました。

（平成26年9月26日　於国立情報学研究所）

林　和宏
（名古屋工業大学、DRF企画WG）

詳細な記録・映像はSPARC Japanのサイトで公開されます。
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20140926.html

DRF オンライン勉強会をやっています テーマ：博士論文のインターネット公表

各メーリングリスト[1]でお知らせしたとおり、DRFでは、平成26年9月8日から博士論文のインターネット公表に関する勉強会を開催しています。この原稿を準備している時点（9月19日）では、一つ目の班討議「平成25年度の取組と課題」について、お互いの経験を話し合っているところです。勉強会の内容については、今後も月刊DRFやメーリングリストなどでご報告していきます。

◎ 各班の方に聞きます：勉強会、どんなことを話し合っていますか？雰囲気はどうですか？

１班：医学系大学の担当者で構成されています。お互いの理解を深めるため、各設問に対する全体的な意見交換を行うよう心がけていますが、自然と著作権関連や教務部門との連携・分担関連の話題が多くなってきました！

２班：医学系大学＋αです。主に、著作権の扱いや学生への周知について話し合っています。最初はメールでのディスカッションに戸惑いましたが、少しずつお互いの意見交換ができるようになってきました。

３班：総合大学が多く、現在は主に、大学院担当との連携や学生への周知について話し合っています。各大学でかなり事情が異なるため、まずはお互いの状況や課題を把握することに力を入れています。

４班：文系、理系、総合とバラエティに富んだグループで、意見交換をしているところです。まだ始まったばかりですが、各大学の周知方法、様式、ワークフローも様々で、新鮮な発見があります。課題も芋づる式にでてきましたので、これからまとめがんばります！

[1]『[DRF-members:117]機関リポジトリ担当者向け勉強会「博士論文のインターネット公表」の開催について』、『[drf:4124] やります！機関リポジトリ担当者向け勉強会「博士論文のインターネット公表」』

かたつむりとオープンアクセスの日常

【連載】第９回
ネブラスカ大学リンカーン校の機関リポジトリ担当者が感じる、OA運動との距離感
Paul Royster says, “My current attitude regarding OA is to step away and leave it alone.”

リポジトリ業界に浸かって長い人の中には、ネブラスカ大学リンカーン校（University of Nebraska – Lincoln; UNL）という名前に聞き覚えのある方もいるでしょうか。カレントアウェアネス・ポータルでその急成長について取り上げられたこともある[1]、アメリカで2番目に大きいと言われる機関リポジトリを持っている大学です。そのコンテンツの利用状況を分析した論文もあり[2]、自分も修士論文の中で引用していました。

その自分が引用した論文の著者でもある、UNLのリポジトリ担当Paul Royster氏が「今はもう自分と”OA”との間には距離がある」と述べている記事[3]を読んで、それでいいのだろうか、と考え込んでしまっています。

Royster氏の考えが掲載されたのは、本誌第52号の栗山先生の連載[4]でも紹介された名インタビュアー、Richard Poynder氏のブログです。Poynder氏のインタビューに答えたRoyster氏は、最初は当然、自分のことをOA運動の先駆者だと思っていたし、OAの推進は自身の仕事にとっても益のあることと考えていた、と述べています。アメリカ有数の機関リポジトリ担当であれば、それは当然のことでしょう。

状況が変わったのは2012年、SPARCが主催するOAイベントに出席したときだったといいます。そのイベントの席上でRoyster氏は、CC-BYあるいはそれに準ずるライセンスが文献に付与されていることが、OAにとって不可欠の要素であるとSPARCがアナウンスするのを聞きました。

機関リポジトリのようないわゆるGreen OAの場合、CC-BYのようなオープンライセンスを付与してコンテンツを公開するのは至難です。CC-BYにすることを強調しすぎるのはリポジトリ担当にとってはまずい、と主張したものの聞き入れられなかったRoyster氏は、「OA運動からはもう、自分たちのやっていることはOAだとはみなされないのだ」という結論に至ったのでした。

Poynder氏のブログではここから、OA運動の発端であるBOAI、そのOAの定義に従えばCC-BYのような、コンテンツの再利用を許すようなライセンスを付与するのがOAだ、というのはその通りなのだけれども…と、話が続いていきます（ブログ本体の記事は比較的コンパクトですが、その記事の最後にはさらに分量たっぷりに議論を展開し、Royster氏への一問一答全文も載せたPDFファイルが控えています[5]）。佐藤本人はBOAI原理主義者なので「CC-BYがついてこそOA！」と言いたい気持ちもある一方で、それでリポジトリ担当者が「自分たちのやっていることはOAじゃないのか」「Green OAは理想のGold OAに向かって行く途中の妥協点扱いか」と感じ、結果OA運動から離れていってしまうというのは、何かまずい気もしています。OAが商業出版に支配されることになるのでは、という懸念はPoynder氏の議論（PDFファイルの方）でも示されていますが、無邪気にCC-BYの重要性を主張することが結果的に何をもたらしうるかは、頭の隅に置いておく必要があるように思うのです。

もっとも、アメリカで進行中のSHAREプロジェクトのように、Green OAであってもCC-BYの付与のようなライセンス管理は可能だ、やってみせよう、という試みもあります。それが実を結べば、Royster氏が感じたようなOA運動からの疎外感も薄まるでしょうか。

なお、Royster氏へのインタビューが公開されて以降、この記事を書いている2014年9月17日現在まで、メーリングリスト等では活発な議論が（主にいつものStevan Harnad氏を中心に）行われています。興味がある方はJISC-REPOSITORIESのメーリングリスト等を追ってみて下さい。

[1] http://current.ndl.go.jp/node/5041
[2] http://digitalcommons.unl.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1133&context=libraryscience
[3] http://poynder.blogspot.jp/2014/08/the-open-access-interviews-paul-royster.html
[4] http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?plugin=attach&refer=%E6%9C%88%E5%88%8ADRF&openfile=DRFmonthly_52.pdf
[5] http://www.richardpoynder.co.uk/Interview_Royster.pdf

佐藤　翔
同志社大学社会学部教育文化学科助教。
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」（http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/）管理人。

次号予告

特集：速報! Open Access ウィーク 2014
1.「今年は何した?」OAWみんなの活動
2. オープンアクセス・サミット2014
連載：今そこにあるオープンアクセス

オープンアクセスウィークが10月20-26日に迫ってきました。
皆様の機関でのイベント告知、OAW素材、オープンアクセスな写真など、OAWに関する各種情報を絶賛募集中です。
情報をお持ちの方は、oaw@lib.hokudai.ac.jp へお寄せください。

月刊DRFでは、皆さまからのお便りをお待ちしています。
gekkandrf@gmail.com

○読者アンケート ご協力ください。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

○Facebook
https://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation

月刊DRF第57号　平成26年10月1日発行　デジタルリポジトリ連合　http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?月刊DRF